石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第435号　令和2年1月1日発行

企画展 いしかわのおもてなし－屏風絵などの調度を中心に－

《富士巻狩図》－「いしかわのおもてなし」より－

- 新春優品選【前田育徳会尊経閣文庫分館・古美術】
- 墨の美【近現代書】
- 平成回顧【近現代絵画・彫刻】
- 新春優品選【近現代工芸】

- 現地見学報告
- 講演会・ワークショップ記録「鈴木治男展」
- １月の行事予定
- アラカルト　ただいま展示中

令和2年

新年のご挨拶

石川県立美術館
館長　嶋崎 丞

明けましておめでとうございます。

本年二〇二〇年は、いよいよ東京オリンピックとパラリンピックが七月から九月にかけて日本で開催されます。これにあわせて海外から多くの外国人観光客が日本へ訪れる機会を捉え、こうした人びとを日本固有の文化でもてなそうということで、とくに美術館や博物館では、その地域固有の文化を中心とする企画展を開催することになりました。

石川県を中心とする北陸の地域は「工芸王国」と称されるように、独特の工芸文化が暮らしの中に息づいており、日本での有数の工芸生産地であることから、本年は工芸に焦点を絞った国際工芸サミットを開催し、工芸に関連する企画展を開催することになっています。また世界の工芸美術館として名高い「ハンガリーのブダペスト国立工芸美術館のコレクション」も開催されることになっており、日本や石川県の工芸が世界の工芸の中でどう位置づけられるかを知るうえでも、またとない機会になりそうです。

また工芸サミットの開催直前に、金沢へ移転して来る国立工芸館の開館も予定されており、本年の秋は国立工芸館、当館、伝統産業工芸館、歴史博物館などを中心に兼六園周辺の文化の森界隈は、工芸一色に彩られるものと思われます。

本年の正月は久方振りに、あまり公開してこなかった屏風に工芸品を組み合わせて展示する、生活を飾る「もてなし」の展示を開催しています。お楽しみください。

春から初夏にかけては、鴨居玲を中心とする石川の近代美術の紹介もいくつか用意しています。古美術部門では、加賀藩が収集し育んだ優れた文化財の公開も例年通り予定しています。

本年も例年にまして活発な活動を展開して参りますのでよろしくお願い申し上げます。

学芸員の眼

絵巻や画帖と屏風の根本的相違として、前者は一人、あるいは数人の鑑賞者を前提としたものであり、後者は、それよりも多数の鑑賞者を念頭に置いて描かれたものとであることが挙げられます。したがって作品と鑑賞者の距離も必然的に大きく相違し、そのことにも、「おもてなし」の契機があります。今回は、企画第七、八、九の三室を使用しますが、第七展示室は、やまと絵系、琳派の作品、第八展示室は、漢画系、狩野派から折衷派の岸駒まで、そして第九展示室は近代石川で活躍した日本画家から岸浪柳溪や久保田米僊らの作品を展示します。大画面に挑んだ画家たちの思いを、歴史的背景を意識しながら、時代ごとにたどることも一つの鑑賞法です。

石川県文《蒔絵虎渓三笑図織部棚》

第7·8·9展示室

企画展 いしかわのおもてなし －屏風絵などの調度を中心に－

主催：石川県立美術館　後援：北國新聞社

1月4日(土)～2月11日(火・祝)会期中無休

本展は、オリンピック・イヤー、二〇二〇年の開幕を飾る展覧会として開催されます。

それでは、副題が示すように屏風絵などの調度を主体とした展覧会が、なぜ「おもてなし」なのでしょうか。そこで、思い起こしていただきたいのが、祇園祭宵山の日に豪勢な京町屋の一角を開放して行われる「屏風祭」です。そこでは、おもてなしとして秘蔵の絵画や工芸品が飾られ、誰もが自由に見ることができます。屏風が多く飾られることから、「屏風祭」と呼ばれてきました。

「屏風祭」は、応仁の乱で荒廃した京都を復興し、祇園祭を復活させた町衆の心意気を象徴するものとして親しまれており、江戸時代に定式化されたこの風習は、以後各地に伝わりました。屏風によるおもてなしには、その可動性によって、ハレの空間が容易に現出するという屏風の特質が深く関わっています。屏風とは、風を防ぐという意味ですが、正倉院宝物から、奈良時代にはそうした実用性以上の、美的価値が追求されていたことを確認することができます。特に、書院造建築が発展した室町時代以降、固定化された襖絵に対する屏風の自由度から需要が一気に拡大し、やまと絵系、漢画系の絵師らが競って様々な場に適応できる屏風絵を制作しました。

本展では、歴史的な展開を基軸として、室町時代十六世紀から昭和初期までの時代から作品を選びました。そして工芸作品とも、選定にあたっては、新春のおもてなしを意識して、吉祥的意匠や画題を優先しました。

◆観覧料

一　般／八〇〇円（六〇〇円）
大学生／六〇〇円（五〇〇円）
高校生以下／無料
※（　）内は二十名以上の団体料金
※各種障がい者手帳をお持ちの方は無料

◆関連行事

キッズ・プログラム鑑賞講座「屏風博士になろう」

屏風ってどんなもの？ミニ屏風を作りながら、その構造や数え方について学びます。

日　時／一月十九日(日)午後一時三十分～三時
対　象／小学生親子二十名
参加費／無料（子ども一人につき保護者二名まで）
申　込／当日先着（午後一時受付開始）

ギャラリートーク

会期中の日曜日、午後一時三十分から企画展示室で行います。参加は無料ですが観覧料が必要です。

開催日：一月五日、十二日、十九日、二十六日
二月二日、九日

石川県文《虎図》岸駒（右隻部分）

《色絵蓮図酒壺》

前田育徳会尊経閣文庫分館

新春優品選

1月4日（土）～2月11日（火・祝）会期中無休

新しい年が、良き年でありますようにとの願いをこめて、今回は最初に重要文化財《馬郎婦観音》を展示します。『法華経』には、観音（観世音菩薩）はあまねく衆生を救うために、相手に応じて三十三の姿に変身すると説かれています。本作は、美女に姿を変えた観音の説話によるもので、次のような内容です。唐時代の九世紀、中国のある町に突如美しい女性が現れました。町の若者たちはこぞってこの女性に求婚しますが、女性は三日間で『法華経』全二十八品をそらんずることを条件としました。そして馬家の若者がその条件を満たし、女性を花嫁に迎えることができました。しかし婚礼の夜に花嫁は急死し、悲しみにくれた新郎たちは、花嫁衣装を着せたまま葬りました。数日後老僧が現れ、花嫁を埋葬した場所に案内させます。老僧が棺を開くと、中から金の鎖となった骨が出てきました。そこで老僧は、花嫁となった女性は観音だったことを明かしました。

「馬郎婦観音」の説話は、宋時代に盛んに絵画化されたようです。いかにも「悟りに至る大きな乗り物」との意味とされる、大乗仏教文化の所産と言うことができます。前田育徳会本は、この説話の要点である女性のたおやかな美しさを見事に表現しており、そのことが、筆者を李龍眠と伝えるゆえんと考えられます。

今回は、このほかに下村観山の《臨幸画巻（亀）》、横山大観の《秋景》、竹内栖鳳の《鯖ノ図（青花魚）》など大正から昭和初期の日本画の秀作や、中国、日本の近世陶磁器もあわせて展示します。

重要文化財《馬郎婦観音像》（部分）

第2展示室

新春優品選【古美術】

1月4日（土）～2月11日（火・祝）会期中無休

新春を迎えて初めて開く茶会である「初釜」は、新年の季語としても親しまれています。そこで今回の新春優品選は、茶道美術を主体とした構成としました。そして会期中の二月三日が千利休の高弟でカトリックの福者、高山右近の帰天日にあたることから、当館所蔵の《高山右近書状　休庵公宛》と、右近の娘ルチア所持と伝わる《キリスト・聖母子念持像》ほか金沢聖霊修道院ご所蔵のキリシタン遺品をあわせて展示します。

右近の死後、彼の妻、娘および孫の一人が追放先のマニラから日本に戻り、追放前に右近の娘と離縁した加賀藩臣の横山康玄と再会した事実が、イエズス会の日本准管区長の書簡に記されています。彼らがその後どうなったかについては、現在記録が確認されていないようですが、かつて右近の知行地であった羽咋郡志賀町周辺に、加賀藩によって匿われていた可能性が高いと考えることができます。

右近が二十六年間を過ごした金沢には、一六一四年の右近追放時に少なくとも千人近いキリスト教徒がいたと推定されますが、大規模なキリシタン処刑の記録は確認されません。しかし、江戸幕府に対する面従腹背の姿勢を貫き、文化政策によって幕府への対抗姿勢を鮮明に打ち出した加賀藩三代藩主・前田利常の時代に、加賀藩がキリスト教徒をどのように処遇したのかは、右近の妻子らが帰国した事実とあわせて慎重に検証してゆく必要があります。その際に、重要な指針となるのが茶の湯です。今回は、利休の美学の極致ともいえる県文《黒楽茶碗　銘北野》も展示します。これらの名品がどのような方向性を示唆するか、楽しみでもあります。

重要文化財《色絵梅花図平水指》野々村仁清

第6展示室

墨の美

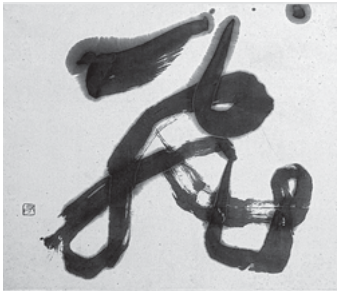
【近現代書】

1月4日(土)～2月11日(火・祝)会期中無休

日本では第二次世界大戦後、筆と墨で「書くこと」が、社会の中で一般的でなくなってしまいました。そのような日常の中、書は本来の言語・伝達としての実用面だけでなく、文字の造形美やそれをどう表現し、どう「みせる」かという、文字を書いた人の美意識を表現することに意識が高まりました。その現れとして、昭和二十三年第四回日展にはじめて書部門が参加し、書は絵画、彫刻と肩を並べて展覧会に展示される「芸術」だと捉えられるようになりました。

今回の展示では、書の古典から伝わる文字性を踏まえた上での、作家独自の「みせ方」に目を向けてみてください。書の作品制作の過程で込められた作者の思いを感じていただくために、まず、文字の大きさ、その配列や配置などの紙面構成の工夫に注目してみてください。筆の動きがもたらす線質からは、やわらかさ、力強さなど伝えたいイメージにあわせた表現を感じることができるでしょう。また、にじみやかすれなど、墨の濃淡などの色調の変化は、印象的な表情を描き出していることもあるでしょう。

書は白と黒のかもし出す世界ではありますが、絵画と立ち位置を同じくするものです。これら書作品は、鑑賞者に何らかの語らいを投げかけ、そして、鑑賞者との感性の呼応もあることでしょう。今回の展示で作者の思いにスポットを当てながら、絵画作品をみるような視点で何がみえてくるか、また、何を感じるかという観点で鑑賞してみてください。



手島右卿《飛》

第4展示室

平成回顧

【近現代絵画・彫刻】

1月4日(土)～2月11日(火・祝)会期中無休

第四展示室では平成期を回顧した作品を中心に展示しています。今回はそれらの中から何点かご紹介します。

日本画の表現は、明治維新と第二次大戦を境に、二度大きな変化を見ました。そして平成期に入ると、よりテクニカルで洗練された表現が主流となります。そのような平成期の日本画を一点紹介するならば、稲元実《21ｓｔＣ　水の星》でしょう。制作年は平成十二年ですが西暦にすると二〇〇〇年。二十世紀の最後に、未来の地球に対する不安と期待を託した作品となっています。

洋画部門では、吉田冨士夫の《交霊術・ＨＡＲＰ》を紹介します。吉田は石川県立工業学校図案科を卒業後、日本硬質陶器株式会社に入社。スペインの陶器会社に招聘され、九谷焼のデザインを生かした絵付け指導をおこない帰国。宮本三郎に師事し、二紀会を舞台として手品師や道化師などをテーマとした幻想的な作品を描き続けました。その他、中村秀雄の《しおさい》や森本仁平の《湖畔のはす田》など平成期に描かれた作品を中心に展示します。

彫刻部門では、さまざまな素材、自由な形や具象彫刻などを展示します。自由な形の彫刻として、梶本良衛《今のワ・タ・シ》を展示します。もともと床置きの作品を、壁に掛けて展示するスタイルへと変更した作品で、空間を自由に漂う彫刻の姿を楽しめるでしょう。その他、中村晋也《Ｍｉｓｅｒｅｒｅ Ⅵ》や末政哲夫《天窓の上の獅子座》などを紹介します。

吉田冨士夫《交霊術・HARP》

第5展示室

新春優品選
【近現代工芸】

1月4日(土)～2月11日(火・祝)会期中無休

令和最初の新年を寿ぐ展示として、近現代工芸部門では、松竹梅など瑞祥に関わる図柄、素材の作品を特集します。

古来より美術工芸品に描かれたモティーフには、現世や来世の幸福を願う人々の思いが込められてきました。とりわけ松竹梅は、吉祥文の中でも、単体や組み合わせで多くの作品を彩っています。宋代の中国において、文人画のテーマとして好まれました。その理由は寒中にも緑を保つ松と竹、寒中に花開く梅が、文人たちの理想とする、清廉潔白や節操を象徴していたという説が一般的です。

松竹梅は厳冬の寒い時期に、友とすべき三つのもの「歳寒三友」として、平安時代に中国から入った図柄とされています。日本では長寿や子孫繁栄を意味し、めでたきことやものを表します。四季を通じて緑を保つ常緑樹の中でも、とりわけ神聖視される松。飛鳥時代の遺品である玉虫厨子に用いられ、古くから日本の美意識を象徴する文様であった竹。春の前触れとして鶯と取り合わせられるほか、好文木とも呼ばれ、学問の隆盛を意味する梅。それぞれ全体的な姿を写すだけでなく、葉や花、実などが意匠化され、今も新たな図柄、新しい作品が生まれ続けています。

今回の展示では松竹梅を中心に鶴亀や海老、霊獣をモティーフとした作品に加え、松や竹などを素材として用いた作品を併せて紹介します。多様な形で表された瑞祥で、新しい年を迎えたいと存じます。

六代清水六兵衛《金彩老梅水指》

現地見学報告

第50回友の会現地見学旅行

良寛さん

令和元年10月19日(土)・20日(日)実施

「良寛さん」というテーマに沿って、良寛とゆかりの深い新潟県を訪れました。今回は野外の見学もあり、途中雨に降られるといった旅ならではのアクシデントもありました。

まずは、良寛記念館へ。ここでは館長よりご解説をいただき、良寛の書やその人について知見を広げました。次は良寛生誕地(橘屋跡)へ。ここは良寛の生家である橘屋の屋敷跡がありました。ここではお堂を見学しました。次に、良寛が若い頃に過ごした光照寺へ。こちらではご住職に良寛さんについてのご解説を頂きながら、寺院の文化財も特別に公開していただき、非常に貴重な機会となりました。昼食を挟み、良寛終焉地(木村邸宅・隆泉寺)へ。こちらでは、地元のガイドさんから、島崎地域について、街を巡りながら、ご解説をいただきました。初日の最後は、良寛の里美術館へ。こちらでは企画展「糸魚川に伝わる名品」展と良寛の書についての解説を館長よりいただきました。

翌日は、重要文化財の旧笹川家邸宅を見学しました。ガイドの方の解説を聞きながら、広大な屋敷内を巡りました。屋敷の堂々たる風格には圧倒されました。次に彌彦神社へ行き、正式参拝を受けた後、短い時間でしたが、神社についてご説明をいただきました。最後は、国上寺へ。こちらでは境内のご解説をいただいたのち、良寛の過ごした山中にある五合庵を見学しました。

皆さまのおかげで、この度は大きなトラブルもなく、無事終わることができました。ご参加いただき、ありがとうございました。

良寛堂にて

講演会・ワークショップ記録

特別陳列「鈴木治男展」

講演会　「私の歩み五十年」

開催日：令和元年十月二十七日（日）

講演会は、鈴木治男先生の画業について、本展出品作品と共に振り返る内容でした。先生が画家を目指すきっかけとなった学生時代や社会人時代の話、メキシコでの研修、絵の題材として取り上げた湾岸戦争とそれを傍観する社会など、画風が確立する過程について講演いただきました。

また、現在描き続けている「水の記憶」シリーズについても、描くきっかけや、画材の変化、自身の病状などを織り交ぜたお話しで、貴重な時間となりました。

ワークショップ「Dance weeー」

開催日：令和元年十一月九日（土）

Dance Weeー（ダンスウェル）はパーキンソン病とともに生きる方や、ダンスウェルの活動に興味を持った方を対象とした、芸術活動としておこなうダンスのワークショップで、参加者は自身の身体や感覚で、観ている作品を、身体を使って表現します。

今回は鈴木治男先生の作品でワークショップをおこないました。参加者は、それぞれの好きな作品から感じた、風がそよぐ身体の動き、鳥の動き、聞こえる音など身体を使い、のびのびと楽しそうに表現していました。新しい鑑賞の仕方で、当館職員も驚きと共に非常に楽しい時間を過ごすことができました。

講演会の様子

ワークショップの様子

1月の行事予定

■美術館でかきぞめ　10時30分～12時　2階ロビー　要観覧料

4日(土)　コレクション展示室で新春恒例の書の展示関連イベント。干支や新春にふさわしい一文字を書き初めします。定員無し。

■キッズ・プログラム鑑賞講座「屏風博士になろう」　13時30分～15時　企画展示室等　無料

19日(日)　ミニ屏風を作りながら、屏風の構造や数え方を学びます。
対　象：小学生親子20名
参加費：無料（子ども1人につき保護者2名まで）
当日13時より、企画展示室前にて先着順で受付します。

■土曜講座　13時30分～15時　美術館講義室　無料

11日(土)　「デザイン教育の黎明 ―工芸とデザインの分岐点―」　担当課長　鶴野俊哉

18日(土)　「再考　美術館開設60年(2)」　修復工房次長　高嶋清栄

25日(土)　「工芸作品と模倣」　学芸主任　中澤菜見子

■映像ギャラリー　14時30分～16時　美術館ホール　無料

5日(日)　「日本の美　草のこころ―真・行・草―」(29分)
「やきもの鑑定入門　下巻」(43分)

12日(日)　「絵に見る日本美術のよさ」(23分)
「悠久の中国やきもの紀行　用の美を極める　宜興窯」(31分)

26日(日)　「日本の美　琳派の系譜」(29分)
「悠久の中国やきもの紀行　千年の磁器の都　景徳鎮窯」(31分)

ボランティア募集

当館では美術資料の整理をしてくださるボランティアを募集しています。新聞などの美術記事をパソコンに入力する作業です（エクセル使用）。ご自分の都合にあわせて来館し、作業していただきます。

興味のある方は、当館普及課までお問いあわせください。

電話：〇七六－二三一－七五八〇

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.43

《高雅縮緬地友禅訪問着「越前花野」》こうがちりめんゆうぜんほうもんぎ えちぜんはなの

羽田登喜男 はた・ときお

丈172.0cm　桁66.3cm　昭和54年(1979)　第26回日本伝統工芸展　　明治44年(1911)～平成20年(2008)

水仙は、松竹梅と並んで、歳寒三友―寒い季節に友とすべきもの―の一つに数えられることもあるモティーフです。梅と同様、寒中で美しく香り高い花を咲かせる植物として、その気高さが好まれたのでしょう。

本作は、日本における水仙の三大群生地の一つ、越前海岸の風景に取材したものです。群生する水仙を写実的に描き、肩から裾にかけて徐々に色彩が濃く、コントラストが強くなっています。どこまでも続く広々とした平野を思わせる描写ですが、グレー・黄・白のシルエットが折り重なるように配置された意匠的な構成です。

このように小さなモティーフが連続する図柄は、全体で見ると単調になりがちですが、本作は水仙に見事な一体感があります。描写の確かさに加え、ところどころに枯れて赤みを帯びた葉を描いた、加賀友禅特有の表現「虫喰い」が大きな効果を上げています。

作者の羽田登喜男は明治四十四年(一九一一)金沢に生まれ、南野耕月のもとで加賀友禅の技術を習得しました。この頃すでに石川県では木村雨山や毎田仁郎などが活躍しており、さらなる飛躍を求めて、京都の曲子光峰に弟子入りし、京友禅を一から学びました。京都で独立後、日本伝統工芸展等で入選・受賞を重ね、昭和六十三年(一九八八)に重要無形文化財「友禅」保持者に認定。優れた構成力、高い技術を駆使し、工夫を凝らした独自の技法による、多彩な作品を作りました。

次回の展覧会

令和2年2月15日(土)
～3月19日(木)
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分	第2展示室
天神画像と「文」の取り合わせ	古九谷・再興九谷名品選

第4展示室	第5展示室	第3・6展示室
空間との対話 戦後の立体造形 【近現代絵画・彫刻】	古に倣う 写しの魅力 【近現代工芸】	優品選 【近現代絵画・彫刻】

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　370円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金
1月6日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

1月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

1月の休館日は
1日(水)～3日(金)

広告
「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？
石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ
郵送配布!! 3,000部発行
ターゲットを狙った 知名度向上
県立美術館発行の 信頼度の高い広報媒体
お問い合わせは ☎092-716-1401
株式会社ポープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第435号(毎月発行)
2020年1月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。